在職中又は休職中の発達障害者に対する作業管理支援の技法開発について

○西脇 昌宏（障害者職業総合センター職業センター企画課　障害者職業カウンセラー）
森 優紀・松浦 秀紀（障害者職業総合センター職業センター企画課）

1　はじめに

障害者職業総合センター職業センター（以下「センター」という。）では、平成17年度から知的障害を伴わない発達障害者を対象としたワークシステム･サポートプログラム（以下「WSSP」という。）の実施を通じて、発達障害者に対する各種支援技法の開発・改良に取り組んできた。

近年、WSSPの受講者に占める在職者、休職者の割合が増加傾向にあり、令和元年度は全体の６割を超えている。在職中又は休職中の発達障害者の中には、短時間の単一作業であれば作業遂行が可能なものの、１日又は数日間にわたる複数の作業になると様々な課題が生じる者が多い。その結果、抱える仕事量が多くなって疲弊したり、叱責や人間関係の悪化により抑うつ状態等の二次障害の発症、職場不適応に繋がる事例が散見される。

本発表ではWSSPにおける実践から発達障害者の作業管理上の困難さについて概観し、今後の作業管理支援における開発の方向性について発表する。

2　ワークシステム･サポートプログラムの概要

WSSPは、５週間の「ウォーミングアップ･アセスメント期（以下「アセスメント期」という。）」と８週間の「職務適応実践支援期（以下「実践支援期」という。）」の13週間で構成されている。

アセスメント期では、WSSPの受講者の障害特性と職業的課題について把握している。実践支援期では、アセスメント期で把握した受講者の特性と職業的課題に対する自己対処や、事業主に依頼する配慮事項等の検証を行うため、就業場面を想定したより実践的な支援を行っている。

WSSPは、「就労セミナー」「作業」「個別相談」で構成されており、それぞれを関連付けて実施している。例えば、就労セミナー（職場対人技能トレーニング）で練習した「報告する」というコミュニケーションスキルを作業場面で実践した結果、話しかけるタイミングが分からず苦労したという結果が出たとする。そのような場合、個別相談で、話しかけるタイミングの判断や話しかけるためのクッション言葉等について助言を行い、再度作業場面での実践を促すというイメージである。

3　「作業」の概要

WSSPにおける「作業」では、多様な作業課題（表）を設定し、受講者個々人の障害特性や職業上の課題に関する詳細なアセスメントを行っている。そして、アセスメント結果に基づいて自己対処の工夫や必要な周囲の配慮事項を検討する。

表　WSSPにおける主な「作業」の種類

ワークサンプル幕張版	その他の作業	民間事業所での職場実習
・事務課題 数値チェック、作業日報集計 ・ＯＡ課題 文書入力、数値入力 ・実務課題 ピッキング、プラグタップ組立	・商品管理作業 ピッキング、検品、梱包、請求書作成 ・データ管理作業 顧客データのチェック、入力 ・アンケート分析作業 アンケートのデータ入力、集計、レポート作成 ・コンテンツサービス 新聞雑誌の回覧準備作業 ・事務文書作成 ・メモ帳作成 ・清掃	・簡易事務作業 ・身体、手腕作業

アセスメント期では、作業の基本的な流れ（図）における各段階のアセスメントを行う。

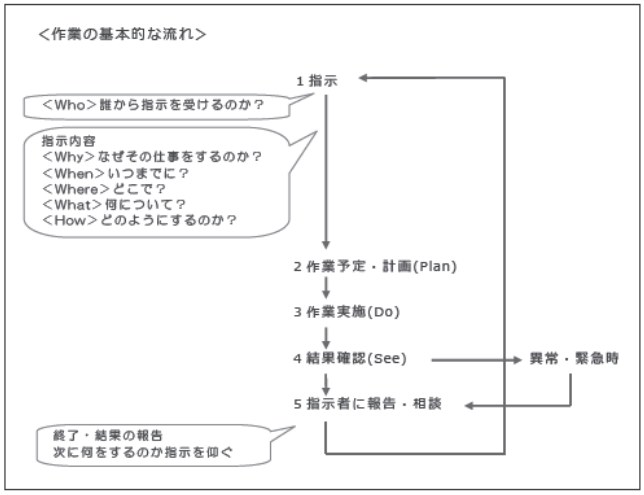

図　作業の基本的な流れ

実践支援期では、受講者の目標に合わせた実践的な作業場面を設定し、遂行状況の確認や、対処法の効果検証、必要な周囲の配慮事項の検討などを行う。実践支援期の作業は全般的に工程数や留意点が多く、個々の目標によっては予定変更や複数タスクのスケジューリング等の要素を組み込むこともある。

4　発達障害者の作業管理の困難さと技法開発の視点

WSSPの受講者に占める在職者・休職者の割合が６割を

超えた令和元年度の事例を分析すると、指示受けから報告までの一連の流れにおいて広範囲に困難さがうかがえた。

指示受けの段階では、「完成形のイメージがずれる」、「聞きそびれた内容を自己判断で補う」、「依頼する、断ることができずに仕事が増える一方になりやすい」、予定・計画の段階では、「優先順位がつけられない」、「タスクを細かい作業に分けて予定に入れられない」、「時間の見積もりがずれる」等のエピソードが確認された。作業実施の段階では、「一つの仕事をしている時に別の仕事が入ると混乱する」、「完成度を追求し時間をかけすぎる」、「書類の整理整頓ができない」、「記入したメモや付箋の紛失」、「メモを取るが、その他の情報に埋もれてしまい、適切なタイミングで思い出すことが苦手」、「一つのタスクが終わるまで別のタスクに取り組めない」等のエピソードが確認された。結果確認の段階では、「タスクが複数になると進捗度合いを正確に把握できなくなる」、報告・相談の段階では、「進捗や時間超過の報告を忘れる」、「進捗報告があいまいになりやすい」等が確認された。

その他、「To Doリストにするとできない所が明るみに出て怒られるから可視化したくない」、「職務でミスを重ねるうちに、叱責される恐れからコミュニケーションをとらなくなった」等、作業管理を阻害する「認知」の存在も確認された。

作業管理は、PDCA（Plan-Do-Check-Action）を意識しながら与えられたタスクを制限時間内に仕上げるという一種の課題解決と言える。この課題解決を的確に行う機能は実行機能と呼ばれている。池田（2018）によると、実行機能には、目標形成、プランニング、プランの実行、評価と調整という、いわば行動のPDCAサイクルを支える様々な認知処理が含まれるとしている。以上から実行機能は作業管理の円滑な遂行を支えていると整理できるが、複数のタスク管理、中長期的な作業管理となれば、複数のPDCAサイクルを緻密に管理する必要が生じるため、実行機能の重要性は一層増すものと考えられる。また、ADHDを筆頭に発達障害者の実行機能の弱さを指摘する知見が多く見られることからも、実行機能は、発達障害者の作業管理能力をアセスメントしたり、効果的な作業管理支援を検討する上で重要な視点になると考える。

５　作業管理支援開発の今後の展開

把握した発達障害者の作業管理上の困難さを主に実行機能の観点から整理し、関係する知見の情報収集を踏まえ、今後の計画として、以下の４点を考えている。

(1) 作業管理支援の実施状況及び事例の分析

これまでWSSPにおいて実施してきた作業管理支援の実践事例の集約と分析を行い、アセスメントの視点や効果的な対処策、今後新たに開発が必要なポイントを整理する。

(2) 作業管理支援に関する情報の収集及び分析

発達障害者の作業管理支援に関する国内外の先進的な知見の情報収集を行う。

(3) 試行モデルの試作と検証

(1)、(2)の結果を踏まえ、複数のタスク管理や１日で終わらない作業管理に必要な能力・スキルのアセスメントの枠組み、作業管理において効果的な支援策、アセスメント及び対処法の実践が可能な作業課題という３点で試行モデルを作成・検証する。

(4) 実践報告書の作成

新たに開発した作業管理支援の概要、実施方法、実施結果、支援事例及び留意事項を取りまとめ、実践報告書を作成する。

６　最後に

実行機能は幅広い分野で注目されている。教育分野では、効果的な学習支援や認知機能を高めるプログラムの開発、医療分野では脳損傷患者への認知リハビリテーション、心理療法では、情動障害への治療モデル等の形で実行機能がその理論的基盤となっている。そのため技法開発においては幅広い分野から情報収集を行い、プログラムでの実践を踏まえて柔軟な発想で職業リハビリテーション分野への応用を検討したい。

【参考文献】

1) 障害者職業総合センター職業センター：「発達障害者のアセスメント」, 独立行政法人高齢・障害・求職者雇用支援機構障害者職業総合センター職業センター（2019）
2) 障害者職業総合センター職業センター：「発達障害者のワークシステム・サポートプログラム　発達障害者のための手順書作成技能トレーニング」, 独立行政法人高齢・障害・求職者雇用支援機構障害者職業総合センター職業センター（2017）
3) 加藤順也・北村博幸：発達障害児の実行機能の評価と介入の現状と課題，北海道教育大学紀要（教育科学編），第63巻第２号，p.273-283（2013）
4) 田中圭介・杉浦義典：実行機能とマインドフルネス，心理学評論，Vol.58 No.1，p.139-152（2015）
5) 池田吉史『知的障害の子どもの自己制御の支援』，「シリーズ　支援のための発達心理学　自己制御の発達と支援」，森口佑介編，金子書房（2018），p.66-77

【連絡先】

障害者職業総合センター職業センター企画課
e-mail：csgrp@jeed.or.jp
Tel：043-297-9042